

フランス・ニースロスチャイルド美術館内日本庭園

築造報告

福原成雄

はじめに

フランス・ニースロスチャイルド美術館内日本庭園築造は、フランス芸術アカデミーの終身幹事であるドートリーヴ氏からフランスアカデミーの会員でもある日本テレビ氏家齊一郎会長に修復を依頼されたことに始まります。日本テレビヨーロッパが窓口となり設計者を探されている時、2001年に行った英国タトンパーク日本庭園修復工事の様子が日本テレビによって取材され、その時の記者の推薦で私（ガーデンデザイングループ無我）に修復設計の依頼がありました。

日本テレビは25年前にも小林与三次前会長がポストン美術館に「天心園」という日本庭園を寄贈しています。その時の設計、施工監理者が私の恩師である中根金作先生で、不思議な因縁を感じ身の引き締まる思

いでお引き受けしました。

ロスチャイルド美術館は、シャルロット＝ベアトリス・ド・ロスチャイルド（1864～1934）によって、1905年に美しいコートダジュールの土地を得てから7年後の1912年に、ヴィラ・イル・ド・フランス（ヴィラ・ロチルドの建造当時の名称）として建設されました。現在はフランス学士院の芸術アカデミーの持ち物で、1991年からは学士院所有の歴史的建造物を預かり、経営している民間会社キュルチュール・エスパスによって維持管理されています。

ベアトリスは、裕福な銀行家の家に生まれ、同じく銀行家、モーリス・エフリュシの妻となり、ベルギー王・レオポルト2世と争った結果、現在のヴィラの土地を獲得しました。工事についても自分が線を引くほどに完璧主義者で、「うるさい」お嬢様であったようです。

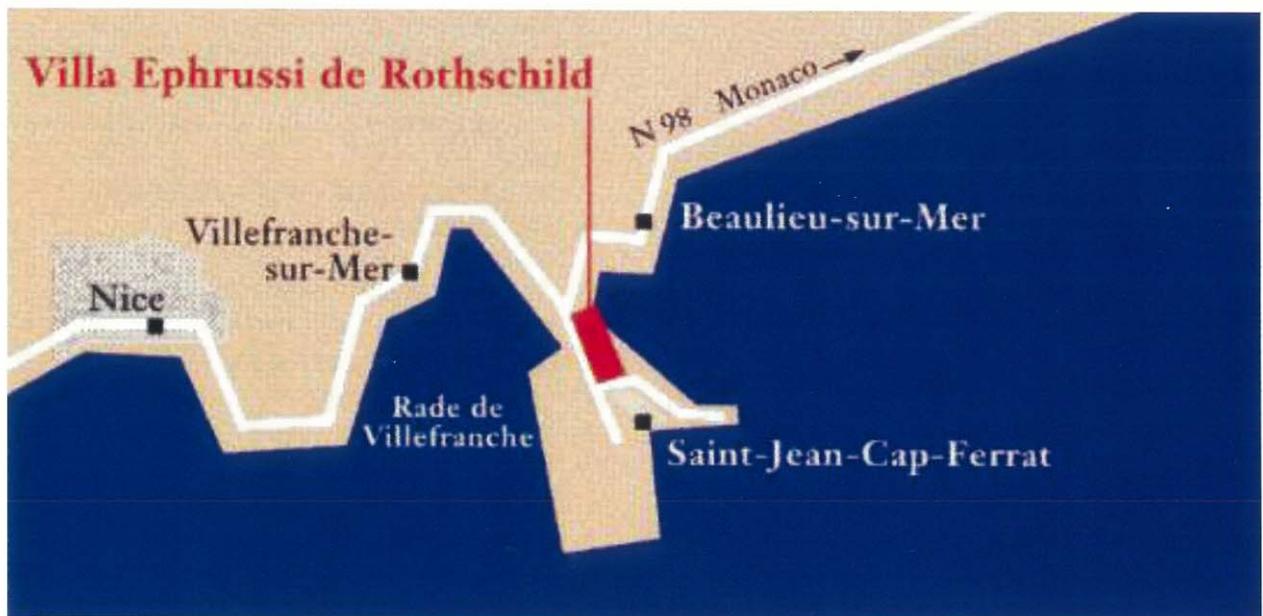


図-1 位置図



写真-1 フランス庭園からヴィラを望む



写真-2 ヴィラよりフランス庭園を望む

現在のヴィラは多数の美術品を所蔵するとともに、両側に地中海を望む半島の中心に位置し、その比類なき眺望と庭園で世界中の人々を引きつけています。

日本庭園もその当時に作られたようですが、美術館、各機関等にも記録が何も残されていませんでした。

コートダジュールは避暑地として栄え、文化的にも発展し、20世紀に入ってから、ピカソ、マティス、シャガール、コクトーなどアートの巨人たちが住み着き、コートダジュールからインスパイアされた作品をたくさん残しています。

修復設計工事は、2002年の春に現地調査を行いました。帰国後、修復設計図面の作成をし、設計打ち合わせと施工業者選定、材料発注のため夏に渡仏し、関係者と修復内容の説明、庭園材料の確認、施工業者と工事方法、工事見積等の打ち合わせを幾度と行いました。そして2002年12月から修復工事を開始し、日仏協力のもと2003年3月末に完成いたしました。

開園式は日仏関係者、財界、ジャーナリスト等、約80人が参加して盛大に行われました。

ロスチャイルド美術館庭園の概要、日本庭園修復設計、施工監理等の内容について報告いたします。

(図-1 参照)

(写真-1・写真-2 参照)

1. ロスチャイルド美術館の管理組織

1) フランス学士院

ロスチャイルド美術館や、パリジャックマール・アンドレ美術館も、フランス学士院の持ち物で、芸術アカデミーに属しています。

学士院は、芸術アカデミー、フランス語アカデミー、文学アカデミー、科学アカデミー、政治・倫理アカデミーの5つのアカデミーから構成されています。

学士院とアカデミーは、アカデミー会員によって運営されています。かつての会員には、化学者のパスツールや文学ではバルザック、ユゴーも、現代では、あのパントマイムのマルセル・マルソー、映画監督のマルセル・カルネやロマン・ポランスキーも会員となっています。

2) キュルチュール・エスパス

100%民間会社でありながら、学士院所有の歴史的建造物を預かり管理運営をしています。ただの管理会社ではなく、あくまで収益重視のビジネス経営です。キュルチュール・エスパスが入る前の学士院運営による多くの美術館は、どこも荒れていたそうです。

2. ロスチャイルド美術館内日本庭園に関する資料

学士院とアカデミーの両方で資料をさがしていただきましたが、ヴィラ・イル・ド・フランス建設当時の庭園に関する資料は保管されていないとのことでした。

しかし、通訳兼コーディネーターの佐々木貴子さんの知り合いであるパリのジャックマール・アンドレ美術館に現在お勤めで、かつてフランス学士院にお勤めだったマダムから「どうしてベアトリスおよび当時の職人は日本庭園を知り得たのか」という質問に対し開口一番「アルベール・カーンの影響があるでしょう」とのことでした。アルベール・カーンは1900年初頭に日本庭園の美しさをあちこちに紹介しており、それで知ったのではないのでしょうか。1905年に土地を得てから7年後の1912年に完成をみたヴィラなら、その影響は十分に考えられることです。

1) アルベール・カーン博物館

創設したのはフランスの銀行家アルベール・カーン。カーンは、明治時代の財界指導者・渋沢栄一や、三井・大倉・浅野などの財閥関係者とも交流を持ち、第一銀行の株主にもなり、日本人のための奨学金制度をつくるなど、日仏関係の橋渡し役にもなっていた人物です。莫大な私財を投じて「地球史資料館」を作り、撮影隊を世界中に派遣し、当時としては貴重なカラー写真(オートクローム方式)を多数コレクションしています。

北白川宮や朝香宮、東久邇宮などの日本の皇族も、訪仏すると、パリ西南のブローニュのカーン邸(現・博物館)を訪問され、その際にも多くの写真が撮影されています。

博物館内は、カーンが世界中を歩き集めた多くの貴重な資料が展示されており、また、昔のフィルムが自由に閲覧でき、しかも、パソコン上で見たいビデオを選ぶと、ライブラリーが画面にうつってロボットがテ

ープを探してデッキに入れるまでが見られます。

東京や京都、奈良のビデオもありました。

博物館の庭園にでると日本家屋や茶室があり、カーンが日本人の庭師に作らせた美しい日本庭園もあります。

(写真-3・写真-4参照)



写真-3 アルベールカーン博物館



写真-4 アルベールカーン博物館日本庭園

3. ロスチャイルド美術館庭園概要海にたたずむ7つの庭園

(庭園ガイドブックより翻訳)

ベアトリス婦人は、周りを海に囲まれたビラの主庭を滝と池に飾られた船のデッキに見立て、忘れ得ない様々な航海の思い出を“フランスの小島”と名付けて航海した異国の風景を作りだしました。

当時は30人の庭師を雇いキャプテンに扮したベアトリスは庭師に水兵のような赤い房のついたベレー帽を

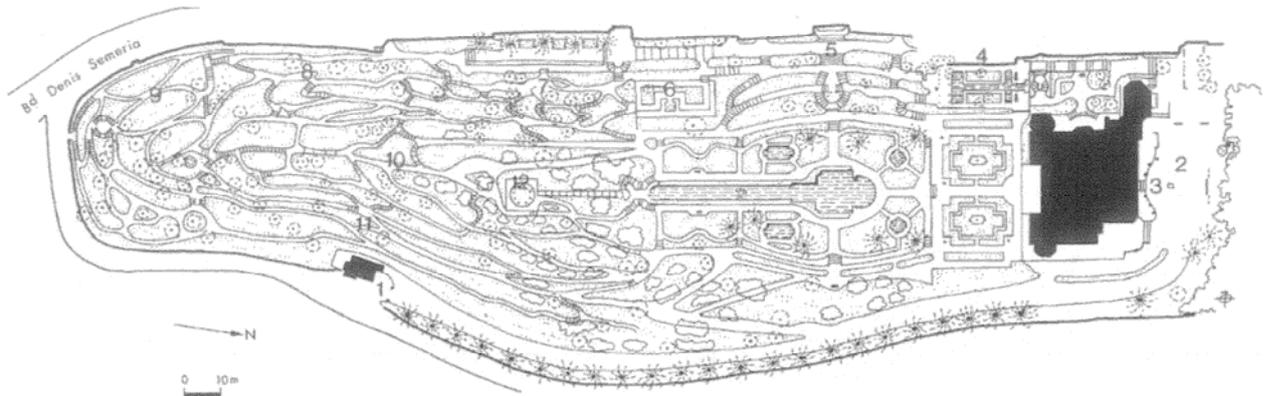


図-2 ロスチャイルド美術館全体平面図

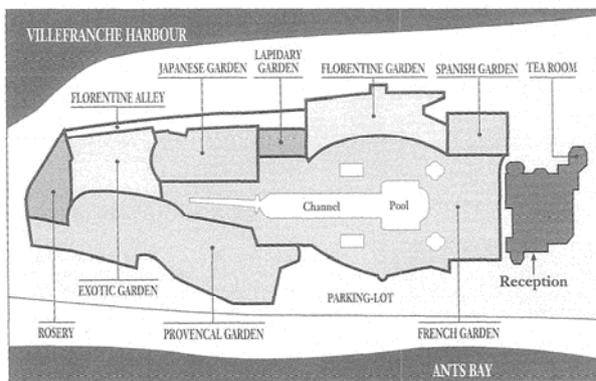


図-3 施設及び庭園配置図

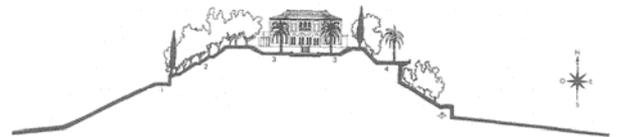


図-4 断面図

被らせて仕事をさせていたようです。長い航海での偉大な収集を喚起させる異なる7つのテーマ（フランス庭園、スペイン庭園、イタリア庭園、彫刻の庭、日本庭園、ローズガーデン、プロバンス庭園）で庭を構成し、約10エーカー（40,470㎡＝約4ha）の館を囲む敷地内に庭園を作ったのです。現在は6人の庭師が庭園の管理を行っています。

（図-2・図-3・図-4 参照）

1) フランス庭園

異国情緒あるヤシの木とリュウゼツランの群生と“愛の神殿”（トリアノンのレプリカで、滝の上部に位置する。Palazzinoの水面に映る姿は芸術愛好家の為の特別な場所である。）によって引き立つ古典的な池が中心になっています。（写真-5 参照）

2) スペイン庭園

水生植物を展示した池とピンクの大理石の列柱、パーゴラで構成されており、パラダイスバードやジャスミンが植え込まれ、赤茶色のスペイン風タイルで舗装されたパティオは、こじんまりとした涼しげな空間を造りだしています。（写真-6 参照）

3) イタリア庭園

大理石で作られたグロットの上部には蹄鉄をモチーフにした階段が設けられ、周りに季節の花々が植え込まれています。

4) 彫刻の庭

建築家が館の中に展示出来なかった数多くの彫刻が展示され、その周りにはシャクナゲやツツジ、アジサイが植え込まれています。（写真-7 参照）



写真-5 フランス庭園



写真-6 スペイン庭園

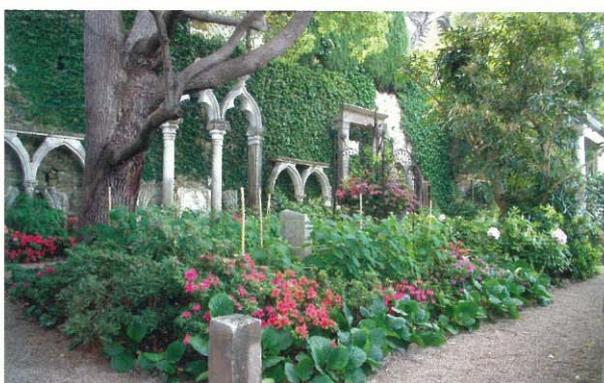


写真-7 彫刻の庭



写真-8 日本庭園



写真-9 日本庭園



写真-10 ローズガーデン

5) 日本庭園

小さな寺院と竹のスクリーンは印象的なサボテンで囲まれ、曲がりくねった小道の異国庭園へと導くように作られています。(写真-8・9 参照)

6) ローズガーデン

六角形の神殿の下部に広がるバラ園は、5月に見頃

となります。(写真-10 参照)

7) プロバンス庭園

オリーブ、ヤシ、ミモザというプロバンス地方の植物が植えられ風化して自然な姿になっています。

4. ロスチャイルド美術館内日本庭園 修復設計・調査

1) 庭園管理責任者との打ち合わせによる作庭条件

- (1) 現存する庭園施設にとらわれず自由な発想で作庭してほしい。
- (2) 枯山水は最近作庭されたものであり、より日本的に造り変えてほしい。
- (3) 庭園全体が日本庭園として観賞できるように作庭してほしい。
- (4) 既存の池は拡張し、橋を架けてほしい。

2) 作庭の基本方針

- (1) 現況の庭園空間（枯山水の庭、池泉の庭）、庭園施設（滝、溪流、池、流れ）を生かした作庭を行います。
- (2) 現況の斜面地形、下段、中段、上段を活用した作庭を行います。下段には現在、新設の枯山水の庭、築造当初の池、流れが細長く配置されています。中段には砂利敷きの道と溪流中央部の沢飛が配置され、下段の枯山水、池を見下ろし近景の景観を楽しむことが出来ます。上段には低木の刈り込みの道が南北に配置され、ここより庭園を見下ろし、遠景の景観を楽しむことが出来ます。これら既存の庭園地形、庭園景観を活用した作庭を行います。

3) 作庭条件、基本方針に基づく庭園空間の配置、庭園施設の整備方針

庭園空間として「枯山水」、「池泉」、「露地」、「野の道」、「花の道」、「その他（藤棚、大刈り込み）」を配置します。

- (1) 枯山水（枯れ流れ石組、枯れ海石組、白砂、雪見灯籠）

枯山水は、北側、石の庭に接し、日本庭園敷地中央の池泉までの間に配置します。

中央の池泉からの水の流れが、石橋下部から白砂の枯れ流れとなり、白砂と石組で海を表現する大海を近景にし、遠景の地中海の景を借景として雄大な庭園景観を表すよう整備します。

- (2) 池泉（滝石組、護岸石組、州浜、水生植物、石橋、木橋、石張舗装）

池泉の庭は、敷地中央に、既存の庭園施設として上段の滝から中段の溪流、下段の池が配置されており、これらの石組修復、下段の池の拡張を行い、日本庭園の中心施設として相応しい庭園施設、石橋、反り橋、州浜を設け整備を行います。

- (3) 露地（遣水、流れ手水、庭門、石張舗装、竹垣）

露地庭は、本敷地南側下段に位置し、既存の煉瓦敷き、流れ、砂利敷き、飛石を露地庭として相応しい市中的の山居の風情を表すよう、石張り、竹垣、露地門、遣り水を設け整備を行います。

- (4) 野の道（砂利敷き、山野草、鹿おどし、沢飛）

野の道は、本敷地中段に位置し、野山の雰囲気を表すよう、山野草、鹿おどし、沢飛を設け整備を行います。

- (5) 花の道（低木植栽、四阿）

花の道は、本敷地中段部、上段部に位置し、アジサイ、シャガ、ヤブラン、ツツジ、シャクナゲ等の日本の低木、地被を植栽し、花によって四季の移り変わりを楽しめるように整備を行います。さらに、上段の道には日本庭園に相応しい四阿を設置し、庭園景観のシンボルとすると共に、ここでの休憩と、四阿からの庭園景観を楽しめるように配置します。

- (6) その他（藤棚）

彫刻の庭に接する庭園入口に設置し、日本庭園入口として相応しい藤棚の整備を行います。

- (7) その他（大刈り込み）

藤棚から上段の道に到る階段は、閉ざされた空間から開放された空間への視覚の変化を楽しめるようにするため、階段に接する既存低木群の大刈り込みを行います。

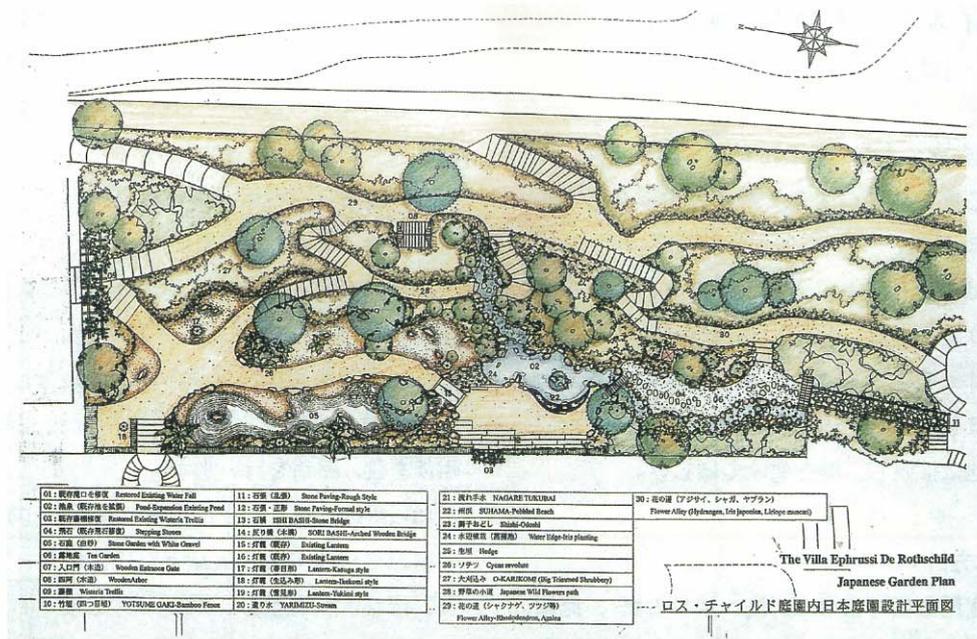


図-5 ロスチャイルド美術館内日本庭園修復設計平面図



図-6 枯山水スケッチ図

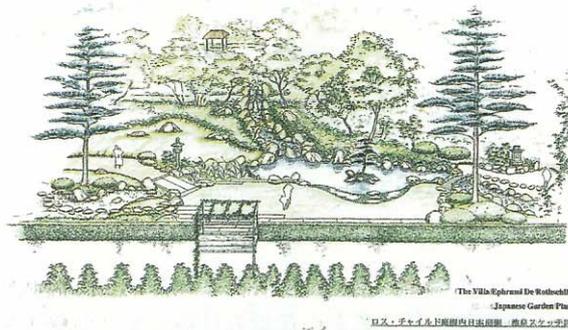


図-7 池泉スケッチ図

(図-5・図-6・図-7 参照)

5. ロスチャイルド美術館内日本庭園修復 工事設計・施工管理

修復工事設計、施工監理に当たり心掛けたことは、現況の庭園施設である滝、池、流、斜面地形と眺望を生かし、日本庭園の様式である池泉庭園、枯山水庭園、露地庭園が一体となり、調和した庭園に成るようにしたことです。庭園資材については、灯籠、四阿、庭門、木橋等を日本から運び、景石等の石材、植物材料はフ

ランス、イタリアで調達しています。多くのナーサリーを訪れ、ロスチャイルド美術館既存庭園施設に相応しい資材選びをしました。

ロスチャイルド美術館内日本庭園では、「借景」の技法として、生垣を低くして地中海を遠景に取り入れ、枯山水で日本の海洋風景である海を手前に作り、日本の海洋風景と地中海が調和するようにしています。「見え隠れ」の技法として、灯籠、四阿、庭門等の姿が植栽樹木等により直接には見えないように配植し、「見立て」の技法で日本の山の景、野の景、海の景を石と植物で表現しています。「生捕り」の技法として、四阿、

庭門、植栽のフレームを通して、庭園内外の景色が見えるようにしています。また、庭園の名称である聴汐庭から聞く庭として、波の音、水琴窟、鹿おどし、滝を落ちる水の音、流れを流れる水の音が楽しめる庭にしています。

設計と施工監理を行うために5回の渡仏を行いました。その日程と作業内容は以下の通りです。

1) 渡仏日程・作業内容

第1回目：2002年3月1日(金)～2002年3月4日(月)
3日間 現場調査・現場視察

関係者顔合わせ及び設計条件の打ち合わせ

第2回目：2002年7月22日(金)～2002年8月4日(月)
14日 設計打ち合わせ、業者選定

- 1) 石材業者を調査、見学、石選び、見積手配
- 2) 植物ナーサリー調査、見学、植物選び、見積手配
(写真-11・12参照)



写真-11 コルシカ島にて景石の選定



写真-12 植栽材料選定

第3回目：2002年12月18日(水)～2003年1月1日(水)
15日間 第1回施工監理

現地石材の最終確認、植物などの材料手配・打ち合わせ・現場確認

コルシカでの発注内容、発注量について最終打ち合わせ

イタリア・インノチェンティ訪問、発注打ち合わせ(車で約4～5時間)モミジ、サクラの高木を選び現場で発注、あわせて価格と配について詳細決定

日本庭園現場にて植物の移植場所、移植する植物の決定、移植穴の準備。池まわり準備工の確認、指示作業

及び1月工事のための打ち合わせ

第4回目：2003年2月17日(月)～2003年3月18日(火)
30日間 第2回施工監理

第5回目：2003年5月1日(木)～2003年5月5日(月)
5日間

5月5日の開園式出席・現場確認と維持管理指導

2) 材料調査と選定、施行業者選定について

フランスで見積を依頼した業者

施工業者：ランテルニエ氏・スコフィエ氏

石材業者：ピエール・ド・ブランド(会社名・コルシカ)ロジュロ氏

植物業者：ジャッキー・ルビノ プロスペリ

3) 施工業者の選定とロスチャイルド美術館のガーデナーについて

ロスチャイルド美術館の紹介で、美術館で過去何らかの工事を行った経験のある5人程の小規模施工会社のランテルニエ氏と、ニース周辺で多く工事を行っている15人程の中規模施工会社のスコフィエ氏と打ち合わせをし、工事内容の説明、工事見積を依頼しました。その後、何度となくメールとファックスで工事方法、使用材料、見積内容について打ち合わせをし、そ

の結果、対応の良かったランテルニエ氏に工事を発注する事にしました。

美術館は、ランテルニエ氏が日本庭園の工事を一度も経験していないことに対し、かなり不安を感じておられました。しかし、私の過去の海外の庭園工事でも現地施工業者が日本庭園の施工経験した業者がいまいませんでしたが、私が知り合った施工業者は非常に熱心で、日本庭園の作庭技術をしっかりと身に付けたいと考えられ、常に相談しながら作庭が行われ、人との交流、造園技術の交流があり、結果として素晴らしい庭園を完成させることができたことを美術館側にお話すると安心されました。

そして、ロスチャイルド美術館の日本庭園管理担当ガーデナーのチェリー氏とセルジュ氏の参加が可能になりました。ロスチャイルド日本庭園作庭も、素晴らしい人々の出会いと造園資材等の出会いがあり、素晴らしい庭園になると確信しました。

4) 工事概要・施工監理日程

準備工事：2002年11月25日から12月20日

- *プラットフォームづくり
- *移植 *解体・廃棄
- *新スプリンクラーシステムの設置、接続

継続作業：2003年1月1日から1月30日まで。

- *材料調達
- *小道、池、流れの底面側面コンクリート基礎作業

2月1日から2月28日まで

- *池、流れの工事 *石組み、設置 *橋の構築
- *スプリンクラーの配置 *植えつけ

3月1日から3月15日まで

- *残りの石、砂利すべての配置
- *植えつけ、藤棚 *東屋の設置
- *石敷き *フィニッシュ、掃除

(写真-13・14・15・16 参照)



写真-13 石組工事



写真-14 植栽工事



写真-15 飛び入り参加の環境デザイン学科の学生と共に



写真-16 ロスチャイルド美術館のスタッフと共に

5) 園名石

庭園名が武田社長案の「聴汐庭」で決定しました。

石の表

聴汐庭

Amenage grace au mecenat
de NIPPON TELEVISION

Mai 2003

日本テレビ

裏面に

日本テレビ氏家齊一郎

6. ロスチャイルド美術館内日本庭園修復 工事の竣工

1) 聴汐庭 Cho-Seki-Tei

(2003年5月5日 開園式配布資料より作成)

夕暮の静かな汐の音を聴く場所という意味をもつこの庭園は、あなたにとって、瞑想の小さな世界です。この庭は、千年以上続く日本古来の庭園芸術の主要な要素を盛り込んだもので、大阪芸術大学助教授・福原成雄氏の設計、施行、そしてアカデミー・デ・ボザー

ルの会員である氏家齊一郎氏が会長をつとめる日本テレビ放送網の寄付により造られたものです。

聴汐庭の庭園施設である四阿、門、木橋、灯籠、水鉢はすべて日本で作られそのままフランスに運ばれました。庭園は建設当時からの地形と施設を活かしながら主に3つの部分から構成されています。南に位置する露地、中央の池泉、そして枯山水です。特に白砂と景石で構成される枯山水は、それ自体が大海を表すものである上に、背景の地中海の紺碧と見事な調和を生むことで、他では決して見ることのできない光景を作り上げています。この、いわば“2つの海を持つ庭園”は、日本の美とフレンチ・リビエラの美が最高の形で結ばれたものといえるでしょう。最初の造園から91年の時を経て、ベアトリスの夢見た日本の姿が完成しました。

(図-8 参照)

2) 日本庭園の歴史概観

日本庭園は、自然風景式を基本に「池泉式」「枯山水」「露地」に大別されます。さらに、外来思想によって「神仙庭園」「浄土庭園」「禅宗庭園」に分けられます。また、建築様式によって「寝殿造庭園」「書院造庭園」

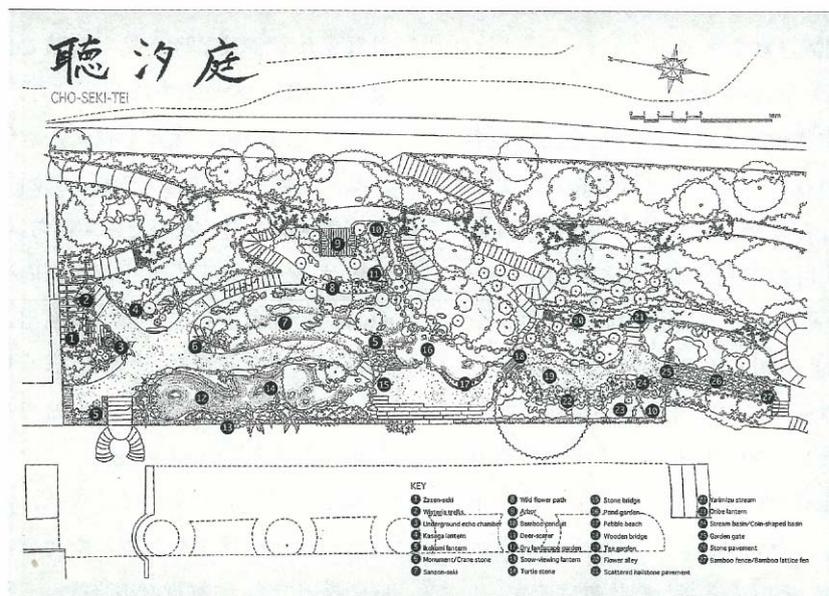


図-8 ロスチャイルド美術館内日本庭園完成平面図

「数寄屋造庭園」に分けられます。

「浄土庭園」(地泉式)は、奈良時代(710~784)に中国から仏教が伝来し、寺院に宗教的意味の死後の世界である極楽浄土を表すために蓮池を中心として造られた庭園で、極楽浄土を表した庭園を浄土庭園と呼んでいます。「寝殿造庭園」(地泉式)は、平安時代(794~1191)に貴族の住居である寝殿の前に行事や宴遊のために造られた庭園です。「書院造庭園」は、室町時代(1392~1573)以後の武士の住居である書院造の前庭として造られ、禅宗や浄土真宗の寺院、近世の貴族の住居の庭として幅広く造られました。「禅宗庭園」(枯山水)は、鎌倉(1192~1333)から室町時代に禅宗思想から生まれた庭園様式で、自然の山水を象徴的に表現しています。数寄屋造庭園(露地)は、安土桃山時代(1576~1601)から江戸時代(1603~)始めに茶道から生まれた庭園様式で、茶室に到る山里の風情をモデルにした道です。

3) 庭園施設説明

藤棚(ふじだな) wisteria trellis

フジの花を觀賞する目的で、竹を使用して作られた棚造りです。藤棚は池の側や広場、休憩所に設置され、庭園の添景としても配置されます。

鹿おどし(ししおどし) deer-scarer

農作物を食い荒らす猪や鹿を追い払うため流れの水と竹を利用して音が出るように工夫された施設、庭園内での動きと音を楽しむ景物として配置されるようになりました。備中湯川町の玄賓僧都が最初に作られたとすることから僧都(そうず)とも呼ばれています。

水琴窟(すいきんくつ) underground echo chamber

江戸時代初め、小堀遠州によって大徳寺孤蓬庵で考案された洞水門が発展して水琴窟となったと考えられます。水鉢から落ちる水の排水施設で、吸い込み口下部に瓶を伏せて使用し、吸い込み口の穴から落ちる水滴が瓶の中で反響する、その音を楽しむ仕掛けです。(写真-26 参照)

四阿(あずまや) arbor

庭園内外の景観、眺望、談話を楽しむ休憩場所、庭園の添景としても配置されます。(写真-21 参照)

雪見灯籠(ゆきみとうろう) snow-viewing lantern

池岸、州浜、水辺近くに設置し、水に映る姿を楽しみます。水に映る姿、浮見が変化し雪見、また傘に雪が積った姿を楽しんだことから雪見灯籠と呼ばれています。

(写真-19 参照)

春日灯籠(かすがとうろう) Kasuga lantern

奈良県春日大社に設置されている石灯籠の総称です。火袋に日月や神鹿が掘られています。

織部灯籠(おりべとうろう) Oribe lantern

茶人千利休の弟子で大名古田織部が好んだ灯籠です。竿が十字架に似ていることからキリシタン灯籠とも呼ばれています。(写真-23 参照)

露地庭で水鉢に接して設置されています。

生込灯籠(いけこみとうろう) Ikekomi lantern

竿(柱)を直接土中に埋める形態の灯籠を総称して呼ばれています。(写真-17 参照)

庭門(にわもん) garden gate

外部から庭園内、外露地から内露地に入る入り口に設置される簡素な門です。(写真-24・25 参照)

流れ手水鉢(ながれちょうずばち) stream basin

流れや池の中に水鉢を据えたもので、実用と觀賞をかねて配置されます。(写真-23 参照)

布泉形水鉢(ふせんがたみずばち) coin-shaped basin

オリジナルは京都市大徳寺山内の孤蓬庵にあり、江戸時代を代表する作庭家小堀遠州遺愛の水鉢です。布泉は中国の古銭を表し、民に広く富を分ち与えるとの意味が込められています。(写真-23 参照)

池泉(ちせん) pond garden

飛鳥、奈良、平安時代にかけて、儀式や船遊び、鑑賞のために海洋風景を表現した池を中心にして生まれた庭園様式です。(写真-22 参照)

枯山水(かれさんすい) dry landscape garden

鎌倉時代後期から室町時代にかけて禅宗思想に基づき生まれた、水を流さないで流れや池、山水を石や白砂で象徴的に表現した様式です。(写真-19・20 参照)

露地 (ろじ)・茶庭 (ちやにわ) tea garden

安土桃山時代に完成された茶道を基にし、外界から清浄無垢な茶室に至る山間、山里の道、庭を表現した様式です。(写真-17 参照)

霰こぼし (あられこぼし) scattered hailstone pavement

山道で霰が飛び散ったような風情を楽しむ玉石敷舗装です。

州浜 (すはま) pebble beach

海や川で、州が出来上がった浜の形態を言い、観賞のために玉石を敷き並べて庭園に応用した護岸手法です。

石橋 (いしばし) stone bridge

流れや池に掛けられた自然石や切石の石造りの橋で、橋からの庭園観賞、庭の添景としても設置されます。

木橋 (もくきょう) wooden bridge

流れや池に掛けられた木造の橋で、橋からの庭園観賞、庭の添景としても設置されます。

遣水 (やりみず) yarimizu stream

平安から鎌倉時代の庭園で、自然の浅く、曲がりの多い小川を真似て作られた流れを表現する手法です。

掛樋 (かけひ) bamboo conduit

水源から水鉢に導水する装置で、竹の節を取り除いたもの。実用と景を楽しみます。

野の道 (ののみち)

春にはクリンソウ (*Primula japonica*)、夏にはシャクナゲ (*Rhododendron*)、秋には紅葉やシュウメイギク (*Anemone japonica*)、冬にはツバキ (*Camellia japonica*)、など四季折々の花木、草花を愛でながら歩く山辺の道です。

花の道 (はなのみち)

アジサイ (*Hydrangea microphylla*) の咲く散策道。



写真-17 庭園入口



写真-18 園名石と庭園全景



写真-19 枯山水



写真-20 枯山水



写真-21 枯山水から四阿の景



写真-22 池泉



写真-23 露地



写真-24 庭門より露地の景



写真-25 庭門



写真-26 水琴窟

竹垣 (たけがき) bamboo fence

仕切り、目隠し、美観、安全を目的に竹を使用した垣の総称です。

四つ目垣 (よつめがき) bamboo lattice fence

丸竹で四つ目格子状に組む、見通しのできる素朴な仕切垣です。

7. ロスチャイルド美術館内日本庭園築造 工事に参加して

辻井博行 環境計画学科 1992年卒業 (E88)
株式会社 辻井造園

今回フランス・ニースのプロジェクトで、福原助教
授の元、日本での資材調達・輸送、現地での施工監理

をさせて頂きました。

私は、2002年12月の現地視察、現場での作業内容の確認、資材の選定、工程、現場内への搬入方法等の打合せから参加いたしました。第一印象は、美術館が高台にあり、見晴らしが良く、最高のロケーションであることでした。

日本庭園は、隣接道路との高低差が20m以上あり、全く道路から見えない場所に位置しておりました。また館内は、管理用通路しかなく、車両の搬入が出来ないため、かなりの困難が予想されました。当初フランス側からは、現場内への搬入方法として人力で行いたいの要望がありました。人力での作業も可能ですが、工期の短縮を計るため、現場内への資材搬入は、大型クレーンの使用と並行に人力で進める方針で話がまとまりました。多少の不安要素は残りましたが、2月からの施工が順調に進むのではないかと思います。

施工監理の先行部隊として、2月3日から弊社辻井造園より技術作業員の蓮田と共に渡仏し、現地にて廣田さんと合流し、日本人スタッフは私を含め3人でのスタートとなりました。

まず初めに、計画図を元に現地測量、位置出し等の作業を行い、現場での問題がないかを確認していきました。一部、新設流れ駆体と門の柱の位置が重なっていた為、新設流れ駆体の解体を余儀なくされました。資材の調達では、日本では簡単に入手できるものが、現地では中々入手出来ず、そして道具等の形状や使い方など、様々な違いがありました。以前にもイギリスの作庭に参加させて頂いており、難題は予想していたつもりでしたが今回も大変でした。資材調達の遅延と現場での作業人員不足が重なり、予定していたスケジュールがずれ込みはじまりました。その遅延を補うため、福原先生から館長に協力依頼をして頂き、館内のスタッフを含めての再スタートとなりました。イギリスでは、聞き覚えのある英語であったのでまだ理解しやすかったのですが、フランススタッフは、フランス語しか話さないため、ジェスチャーでは複雑な説明にも限

界がありました。しかし、現地のスタッフとも、段々とコミュニケーションが取れるようになり、自然と現場のムードが良くなりはじめました。この頃から良いものが出来るのではないかと思えるようになりました。今回は先行部隊として現地入りし、本格的工事の始まる準備工までが大変でした。そして二週間後に福原先生と合流し、主となる石組みから始め、急ピッチで作業が進みました。当初の問題であった搬入も、フランス側スタッフが並外れた腕力を持って、大抵の資材を人界戦術でこなし、現場内での石組み作業でも、持ち抱え運ぶことで解消されました。

今回、フランスでの日本庭園の築造は、私にとっても日本人として誇りに思うことを再認識し、日本の造園技術とフランスの造園技術の交流が出来たことを実感しました。これら現場で得た経験を今後につなげていきたいと思っております。

8. ロスチャイルド日本庭園作庭に携わって…

志水 彩子 環境計画学科 1998年卒業
所属：(社)大阪府公園・都市緑化協会・

Landscape Garden Design Group 無我

2003年5月5日、日本庭園開園式が行われ、ロスチャイルドの日本庭園作庭プロジェクトが終わりました。約1年間、このプロジェクトの植栽担当として福原成雄先生と共に仕事をさせて頂きました。

2002年の3月、パリでスポンサーである日本テレビの方々とお会いしました。初対面にも関わらず、とてもおおらかに接して下さった事は今でも思い出されます。翌日、ロスチャイルドの日本庭園へ向いました。

帰国後、プレゼン用の図面と資料を作り、東京の日本テレビ本社でプレゼンをしました。その時は、氏家会長がご出席されておりました。私は、「今回作られる日本庭園の園名石に掘る庭園名を直筆でお書きになったらいかがですか？」と会長に提案した事が「いいねー」

という具合で進み、感動して大阪に帰って参りました。

2 回目の渡仏は、8 月でした。現地の施工業者との顔合わせから石材探し、植物探しと 2 週間が過ぎました。モナコの日本庭園管理をされているジョージ氏のアドバイスでコルシカ島へ石を探しに行ったり、ペピニエ（植物卸し業者）へ植物を探しに行ったりしました。苔に代わるようなものを探していた時にサジニアという現地の植物に出会えたことは感激しました。

3 回目の渡仏は 12 月、約 2 週間でした。現地の施工業者も決まり、現場は動き出していました。再び材料確認のため 8 月に材料を探しに行った場所へ行きました。また、イタリアにいいモミジがあるという情報を頼りに車で 5 時間掛けて探しに行きました。イタリアのペピニエは甲子園球場が何個でも入ってしまうほどの広さで圧倒されました。

4 回目は 2003 年 2 月、1 ヶ月間、現場での作業となりました。現地の施工業者や庭園ガーデナーさん達とのコミュニケーションには苦勞しました。

終わってみるとたくさんの人が関わって 1 つの庭ができていくことを実感しました。福原先生からは仕事に対する前向きさ、プロジェクトに関わっている人達とのコミュニケーションの取り方、決断力、そして柔軟な発想と遊び心を学びました。また、経験不足だった私を支えて下さった日仏両国の皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。たくさんの素晴らしい人たちに会え、充実した時を共に過ごせた事は一生忘れられない思い出となりました。

9. ロスチャイルド日本庭園作庭に参加して

大阪芸術大学 環境デザイン学科
四回生 佐藤 猛

今回このような貴重な体験ができたきっかけは、三回生の時、福原先生が担当されている、造園施行演習の授業の際に、ニースの日本庭園のお話をお聞きした

のがはじまりでした。授業で日本庭園の図面制作を勉強している私にとって、現場で実際施行ができる、しかも海外で学べるというめったにない機会を頂き、友人七名を引き連れ、ニースへと出発しました。

ニースに到着し期待に胸膨らませ現場作業に取りかかりました。しかし私達は正直なところ、期待よりも、不安の方が大きかったように思います。なぜならば、一つは、はじめての現場で大きなプロジェクト、右も左も分からずフランス人にまぎれ、あたふたとしてしまうのではないかということ。もう一つは、今回ニースに行った学生のうち男性は私を含めて二人、六人は女性でした。やはり力仕事が多い現場、お手伝いにならず、足手まといになるのではと考えていましたが、この悩みは一目で私の取り越し苦勞であるとわかりました。先生をはじめみなさんほんとうに親切な方ばかりで、植栽や石の選定、石積、石張りなど、多くの経験をさせて頂き、学生一同、大変感謝しております。それに加え、私は「ヨーロッパで初、水琴窟の穴を掘った男」という称号まで頂きました。一週間お手伝いさせてもらい、多くのことが学べ、非常に充実した毎日でした。学生の私達にとっては、大変貴重な経験で、一生に残る思い出となりました。現在私達は四回生で、人生の分岐点に立っております。それぞれがどのような道を歩むかわかりませんが、人生の中で大きな糧になりました。私たちがニースに行くにあたってたくさんのご配慮を下さったみなさま本当にありがとうございました。

～一緒に同行したメンバー～

八尋 俊太郎 水流添 佳代 須藤 歩
井関 礼 久米 陽子 清水 里恵 道祖 奈歩

おわりに

先に説明しました設計内容、資材、庭園技法により、日本庭園が理想とする平和な世界と、人々の幸せを表現するために作庭を行いました。ロスチャイルド美術

館の日本庭園が、美術館を訪れる多くの方々の心の安らぎの場と成るとともに、間違いなくそう成ることを念じています。

思い返せば、1996年英国で、王立キューガーデン日本庭園設計、施工管理を行ってからの7年間に、タトンプークフラワーショー出展日本庭園作庭（特別賞受賞）、中国長春中日友好会館日本庭園設計・施工管理、タトンプーク内日本庭園修復設計・施工管理、チェルシーフラワーショー出展日本庭園設計・作庭（金賞、最優賞受賞）、ウェールズボタニカルガーデン日本庭園設計・施工管理（チェルシーフラワーショー出展日本庭園移設）、ロスチャイルド美術館内日本庭園と3カ国7カ所で日本庭園の作庭を行う幸運に恵まれました。このことは、日本庭園の作庭技術が現地の風土を生かし、現地の素材を見つけだし、自然風景を思い描きながら庭園として作り上げることにあり、そのことが海外で日本庭園が数多く求められ、作られる理由の一つになっているのではないのでしょうか。

その後、これら作庭したいくつかの庭園をたびたび訪れ、庭園管理者に、維持管理方法について指導を行うことができました。これからも機会ある毎に、日本庭園を通じた文化交流と、庭園の維持管理を今後とも積極的に進めたいと考えています。

また、私の夢として、大阪芸術大学環境計画学科の卒業生、教え子とともに、日本庭園の作庭を行うこと、そして今までに海外で作庭した庭園の維持管理を担い、海外で活躍できる造園家を育成することです。その夢が、ロスチャイルド美術館内日本庭園の作庭により少しずつ実現しつつあります。

このような素晴らしいロスチャイルド美術館内日本庭園の修復工事の設計と施工管理をさせていただいたことに関して、日本テレビ氏家齊一郎会長、日本テレビヨーロッパの武田信一郎社長、日本テレビ看板アナウンサーであった青尾幸様、また、現地調査から設計、資材探し、施工と共に作業をした通訳件コーディネーターで博報堂からパリ美術館研修のため派遣されてい

た佐々木貴子さん、施行を環境計画学科卒業生の辻井博行さん、建築を友人の金森清正さん、植栽を環境計画学科卒業生の志水彩子さん、廣田アンヌさん、ボランティアで参加してくれた環境デザイン学科学生素晴らしい仲間と教え子に心から感謝とお礼を申し上げます。

さらに、環境計画学科前学科長の清水正之先生、現学科長狩野忠正先生、諸先生には、常に暖かい励ましのお言葉をかけていただき心おきなく作庭をさせていただきました。記して心から感謝の意を表します。